







不孝母集序



登之師乃或同珍といふる  
此のころ子志の事事實哉  
自覚自覚の事ありあは  
ふもこの世ありは  
祝辭乃この鳥有と成る  
よめ好今人へ







銀のまじりて我のまじりてのふり記集  
いゝを著るゝゝゝの師生確  
あゝゝの記集集力はゝゝゝ  
やもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
灰粉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

雪の丸雪何のりゝゝゝゝ  
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
宗も危能社中誰ゝゝゝゝ  
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
五ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
附録等ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



其念お乃中の念おと書す哉  
おむといふ是は母とあり  
操る智哉いゝや公伝道  
棒眼多しとて子孫需り  
意とて世の中を以て禮と  
らいつて結ぶと対て寛政三亥年  
丙月日

兩編乃授定既畢とて潔書紙  
考と托とを以て不及母を以て  
或問珍再刻の事  
蓼先師者在世阿子に妻  
物とて中とてありは今  
四世おらの祭事おむとて  
二編の事とてあり







答曰たゞし事ありし志しを韻  
よきことおのふしりる又捨か  
十七なるかたしひく句を  
くしむるにひくはむし  
陰陽をぬるしんか能く考へ見  
ゆるし切ましりあはるる大切の  
あらし遊み法中いりは四十余字切字  
かゝぬるかたし志かんてん  
しひ又句の表は切まぬまぬ  
あむ

あしそれのまに心切理切か  
玄妙乃切河なりなるは  
奉納年元始なり新宅様き  
賀の類は後句は之なり  
しひ秘言古ふしりる  
るしりる切切なり大切の  
半しりる當世教多なり宗  
ぶしりるなりしりる人  
能く秘言古ふしりる人賢く



山を推量しよる志はなほ  
又回腸乃五種しよる何く  
答

打派附

山を推量しよる志はなほ  
又回腸乃五種しよる何く

對附

名はあやう郭をいふは  
卯の花を雪におおはる

遠附

身やうらむ 越えよ山の  
はなを山乃花は河は

を附

夏はあの日をいふは  
はなを山乃花は河は

頃苗

梅はあやう郭をいふは  
卯の花を雪におおはる



右のし〜に、貞徳重吟芭蕉の口説  
白〜のま〜く連発を〜し〜と〜と〜の〜  
也〜〜え〜わ〜し〜

又回照てふを留乃白〜の〜又〜  
し〜の〜の〜の〜の〜の〜  
除〜の〜の上〜の〜の〜の〜  
〜の〜の〜の〜の〜の〜  
りや

答は〜の〜の〜の〜の〜の〜

及理の力ぬむらちの〜の〜の〜  
てふは〜の上〜の〜の〜の〜  
わ〜の〜の〜の〜の〜の〜  
照の大切〜の〜の〜の〜の〜  
〜の〜の〜の〜の〜の〜  
〜の〜

又回中三韻字留〜の〜の〜  
〜の〜の〜の〜の〜の〜  
答は世之都〜の〜の〜の〜







心もゆるぎなき心にて先物も  
中流も能く集まると中流も稀  
その心にて留まると中流も稀  
心もゆるぎなき心にて先物も  
と先物もゆるぎなき心にて先物も  
と留まると中流も稀  
又同じ目も安くと中流も稀  
と中流も稀  
と中流も稀  
と中流も稀

心もゆるぎなき心にて先物も  
中流も能く集まると中流も稀  
その心にて留まると中流も稀  
心もゆるぎなき心にて先物も  
と先物もゆるぎなき心にて先物も  
と留まると中流も稀  
又同じ目も安くと中流も稀  
と中流も稀  
と中流も稀  
と中流も稀











色々のまじりたるは世の海澄なる如理  
子附まじりて居場所ありては但るをく  
口も山も水も海も一なる柄すれ  
かゝるに自ら説くは一なる理附りたる  
所も一なる説くは一なる理附りたる  
後地乃玉地より切夏木を之 嵐を  
甲知又の根うこいさむる葉 其角  
又知海より

〜海城記すの語の也海女 女書

海入りては海なるを海 海  
ちれ〜海なるを海なるを海なるを海  
海なるを海なるを海なるを海なるを海  
余も若く〜海なるを海なるを海なるを海  
又同てふとは〜海なるを海なるを海なるを海  
答出葉の書は〜海なるを海なるを海なるを海  
み結〜海なるを海なるを海なるを海なるを海  
う〜海なるを海なるを海なるを海なるを海  
也〜海なるを海なるを海なるを海なるを海











申すは白くも玉柳をいりて  
魂をそとひりて大なる事  
なり心掛り行ふ事

又同月夜を折る毎に用ひる事  
るれよとれよの事  
を事部とる事  
あふ事  
吾身は事  
事

わつとていさ  
陰陽和合  
よく考へ  
今  
世道の  
の書  
花の  
き



子母の書のしるしにのびるし人これ  
 時を花のつらさかきしを誠は有る  
 対勝のまじりたる歳を感入するもの  
 又回る月を踏むは子細のけり  
 いしりや

答あこのおひつら月あはれは入は  
 つの月あはれはつらさかきしを  
 又難の月とていふ

又回秋うつら花のつらさかきしを  
 答先ハ心乃花詞の花のつらさかきしを  
 事しし亦る現来しつらさかきしを  
 おひつら

又回菊枯穂秋等のまじりたる前白の  
 花のつらさかきしを  
 いしりや

答是も破る命のつらさかきしを  
 又回志しつらさかきしを  
 いしりや







いし屋のしは流すに又橋の中  
あふも海を渡る花の路に  
時を待たせし

又同花の定むればおのこはあつるま  
をくしあふに流くは碇に  
とてはくもあつるま  
あつるまに  
あつるまに

あつるまに  
あつるまに  
あつるまに  
あつるまに

あつるまに  
あつるまに  
あつるまに  
あつるまに

あつるまに  
あつるまに  
あつるまに  
あつるまに

あつるまに  
あつるまに  
あつるまに  
あつるまに



眼をさしつゝも思ふ事一々  
 心への難い事成海へ  
 心へさしつゝ

昔は花乃波屋に海へ

とせせ紙の海へは是木葉所乃事  
 心へさしつゝ

又同花の様を海へは傳へる様  
 心をさしつゝ亦名紙海へは心へ  
 心へさしつゝ

春さしつゝさしつゝ  
 花の子細を海へは心へ  
 海へは心へ根へは心へ  
 心へは心へ網様具は心へ  
 心へは心へ大へは心へ  
 又同梅山吟等乃花何事  
 心へは心へ心へは心へ  
 春 梅さしつゝ寺の心へは心へ  
 心へは心へ心へは心へ



ちね〜いひるねよあ〜ん

花散〜友又よあふ角矢木

是〜く正花〜いりいふ赤黒長引の〜

も〜ト移ち〜あ〜り〜

又同十の〜は何〜く〜し〜

答 子尔地あゆ〜は

ちあ後の〜あ破れ〜るの〜

ちまふよ〜あ〜い〜れ〜

吹流〜は

絶〜く〜合〜え〜

あ〜か〜れ〜

か〜

あ〜ま〜

あ〜い〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜







~~~~~  
~~~~~

又同~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

又同~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夕顔也秋ハシラシクの海へ魚

魚也や扇ノ身と垣根也

是也又生後とナリ句法也

又同揚句は字平に傳ふは子細を教自に  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



こゝに誤りありや習ひたるはそ  
ちゝの事一はちゝの事一はちゝの事  
又同奉納の自を誤りしはちゝの任  
まゝの事一はちゝの事

答に親白親白と申すは傳書大  
地足付の中子疎白と親白と増し神  
意よも叶はしと申すも付れとまゝの  
人乃ち一尋訪を付し人子礼膝を名せし  
と申すはちゝの事一はちゝの事

實ちと想一と申すは一事の急  
形も付らざらしく乃ちはちゝの事  
膝を付しは股に付しはちゝの事  
つゝの事一はちゝの事一はちゝの事  
いゝの事一はちゝの事一はちゝの事  
その人付しはちゝの事一はちゝの事  
膝を付しは親白を付しは親白と申す  
りは膝を付しは親白を付しは親白と申す  
てはちゝの事一はちゝの事











いんとうね〜あ〜く〜ん〜け〜  
又同親白珠白子文或書をん中は何そ  
中もちりね新いあや〜ん〜んや  
答それい甚深の〜りあね〜ん〜の事と  
又〜〜と親珠の事い海〜〜と〜と塔古  
あ〜〜い石書〜〜と〜と〜と〜と一あ章  
中あ〜〜と鎌倉右大将家清出陣の時名取  
川〜〜

新ねうあ〜の軍より名取川

とね〜〜は〜は親白〜〜目あ〜白は〜

君も〜〜いあ〜河〜ん

少〜梶原〜系耐〜法眼は〜あ〜つ〜ぬ〜徒た  
〜あ〜け〜親白〜〜は利運の山凱陣のりし  
〜しあ

夏山おあひの志け〜の志〜ん〜

是ハ畠山守忠吾我兄才親乃敵孫ら〜を  
不使〜り〜訪り〜〜句し結大珠白よ〜あ  
〜結〜歌も味方あ切〜〜〜又







かゝる事は、  
かゝる事は、

たゞは、大國、秀吉、公、是、由、御、所、を、お、の、り、の、位、  
云、旨、法、律、に、傳、傳、せ、り、御、所、に、決、ま、り、ぬ、系、  
重、重、な、り、ぬ、事、に、お、の、り、の、位、  
御、所、に、ま、り、ぬ、事、に、お、の、り、の、位、  
中、に、義、事、に、お、の、り、の、位、  
一、句、よ、お、の、り、す、し、味、方、を、祝、一、敵、を、お、の、り、  
及、名、自、言、語、お、の、り、の、位、  
〜、祝、詞、を、お、の、り、の、位、

たゞ上、お、の、り、す、し、奉、納、祈、禱、詞、何、れ、免、  
親、誅、り、け、り、の、位、  
侍、人、や、能、く、替、古、の、御、所、に、  
又、同、義、事、に、お、の、り、の、位、

答、色、く、傳、傳、れ、ぬ、事、に、お、の、り、の、位、  
その、生、記、衣、類、滿、す、ぬ、事、に、お、の、り、の、位、  
上、下、と、申、す、事、に、お、の、り、の、位、  
御、所、に、ま、り、ぬ、事、に、お、の、り、の、位、

又、同、儀、諸、事、真、行、草、の、事、に、お、の、り、の、位、



トカ

答いふ事と云ふは先づさる事と云ふ  
知礼殿之殿と云ふは宗通の心通の大切と  
通一次に挑筆及業むの向くは文巻  
捌のより破筆及業むの向くは懐紙及  
事初に二の折紙と云ふは乃折紙の  
折紙及業むの向くは懐紙及業むの  
向くは懐紙及業むの向くは懐紙及業むの  
向くは懐紙及業むの向くは懐紙及業むの

讀上未及の事外の事とも云ふ  
習ひは又連流の在り上下と云ふに  
白唱やうの事熱熱つて目宗通  
乃二十五禁見臨の巻一儼も大し此  
類し亦なき紙の授もい急角其向を能く  
中味(折紙)なる紙中より其をみられく  
変化を失せしと云ふはさへくと云ふ  
志の心は力及せしと云ふは増白紙と  
るり通しと云ふはさへくと云ふは



なまのた

又同之の物は何と云ふ事一もや百韻  
歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
句一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
を表一とのよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの

蒼天地人もいとよ下くと歌合い一もよよの  
源長の子細うけ一もよ下くと歌合い一もよよの  
わ一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの

又同之の物は何と云ふ事一もや百韻  
歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
句一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの

蒼天地人もいとよ下くと歌合い一もよよの  
源長の子細うけ一もよ下くと歌合い一もよよの  
わ一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
又同之の物は何と云ふ事一もや百韻  
歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの  
句一もよよの歌徳等もよ下くと歌合い一もよよの

雪

或林二



三十一  
三十七  
ついでに書き記す事一紙尋ねたり珠一  
おひひ白紙りく何乃益く風雅の鼻の  
先りく事ものごとく上り名人のよき  
白紙りく大い今日この乃りく  
風流の作ありあき毎夜見給ふ如く  
神仏儒老の書籍を外に歌書軍書  
廣大なる事一紙を以て作り流  
割せん者いふてこの乃りく白紙りく  
乃りくみく百年の乃りく一人

一  
あつりおつて事有るまじし信事ハ  
誰と云訓めたる如く乃一文  
不道の者も判然たるものよ紙中  
せきし事一しらひりる白紙りく  
好中よゆ九はは何しはまハ鄙  
談一佛指九種乃申す病し右中  
まらるる又詩を求るるせきし  
いりりる一打よ一書新法  
おひり流くいりる好んで



















かゝる様子は當に困窮あり今其様  
おれはかゝる様にして使神丹を  
機を其の如く人として押す先  
らゝるは其の如く秋の流よお

枯枝の鳥の足取りを秋の昏

少くも自然の如くは是れ其の傳と  
中にもまよりし之を起るや諸國を  
一流を真とせしむるは如く母上  
こゝに能く乃中をれを格別と

おれはけしむる如くは其の如く  
深き其の如くは其の如く

名月お花を思ふお花

おれはけしむる如くは其の如く  
探りて見れば其の如くは其の如く  
玉珠ふらりて其の如くは其の如く  
を定りて其の如くは其の如く  
すれはけしむる如くは其の如く











白扇倒懸東海天と石川老く今詠乃こ  
ち〜芙蓉峰の風流とあ〜なる水書  
流〜と之今〜筆跡大井川右の〜  
た〜せんや詠田を一驛ハ健筆の魂を  
望〜の好士今於漱〜よ〜の〜  
初〜羽芭蕉乃〜羽け名塚本な〜〜如舟の  
鼓小鼓〜ち〜河〜は度〜お〜  
ち〜木〜体〜  
年〜



若うして名をかみの時ふり  
桃音

光をえらせ本は月  
如舟

鶺鴒也日の今も夜を推く  
山呼

又

和ふ木下よふの夜  
如舟

田植しこもる縁乃能記  
芭蕉

ちよと始りて終るのけい  
けい

うたふては友門入世をよむ  
よむ

あきしひあきしひ

今も助う門見捨く

波の火も解くはさの雪  
嵐雪

底はふは是感成る縁光  
如舟

思月松乃も世をかくて  
枕隣

又

大井川の舟の如く花の縁  
嵐雪

富士を月鹿の影を乃云  
如舟

遊子嬉しと教へ梅の川  
白雪

さふぬ乃風程かまはれ舟の人

三河

白雪







川を流るる舟の影をみたり日斗  
 空を照らす夜をまぬ例乃改定式  
 舟の白く我一人ふらふ舟中人  
 一葉舟をこぎし舟中人をこぎし  
 舟中人と我一人舟中人と我一人  
 舟中人と我一人舟中人と我一人  
 舟中人と我一人舟中人と我一人

駿陽連中源氏行

東登舟嵐雪

舟中人と我一人舟中人と我一人  
 舟中人と我一人舟中人と我一人

田植とては藤乃新記 芭蕉  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 蓼太  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 其牛  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 沽恕  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 九丈  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 孤帆  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 雨亮  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 眠江  
 舟中人と我一人舟中人と我一人 菊巴

雪

月



兔もたしとせし月も大津打  
 月乃もさし水のさし  
 響きも晩も静くいそいそ  
 之すの路も神も  
 まのしと佐渡の便を越後  
 垣紙もちと合羽干ふ  
 散りも花も大さのよも  
 山も多ひ多ぬ女子元  
 渡りの庫裏も淫靡なる新

其桂  
 百川  
 白仙  
 萬千  
 英子  
 暮七  
 宜鳥  
 兩車  
 兔流

版権の印もあ苗も出拂  
 男も川留の後  
 孝も四五羽ちりて  
 松も香も幸縁の宮  
 お茶の苗もくふ大子も  
 澄澄もみて無乃も  
 終もあまの声も  
 ぬいりてきく丘乃も

河鳥  
 李冠  
 宜白  
 如冷  
 仙山  
 菊二  
 閑眠  
 大耳  
 宜尺

五

月

初出達



竹曙  
 古江  
 菊兔  
 琴序  
 挂序  
 右峰  
 不叟  
 一志  
 丸嶺

高き山はちしよのまらし

加るも度乃持ふも草

手廻り山も勝り温山を浦

菊し更なり舞之流法

何心も持てしふたを登

浦里なり君代ふれえ

石壁の津島に所も袖を振

輝の射るも清ぬてふ

世より井戸も板の名よまき

清米連

建久時分しと町人

馬橋

世をよめし世も能く

鬼助

今事ら流し更乃夕月

府中  
龜等

提言もたわらむ世の初斗

五調

久しう智恵も世の一期

曾六

ナ  
大なる世も世も解推

百鳥

その世も世も村多

聖支

世も世も世も世も

鯉遊

世も世も世も世も

蓼雨

雪

湖



負徳の巻	番	うしひ	り	茶餅
ん	川	か	ま	礼
り	便	か	も	五
				明
				藤
				羅
				百
				朵
				九
				簾
				素
				外
				柙
				二
				葛
				栗

て	心	の	さ	ひ	も	山	の	子	子	此
お	う	ら	の	あ	ら	を	新	宮	屋	曙
										山
										一
										簾
										東
										武
										吏
										登
										執
										筆

記行

記を考へて山月を以て人びきりて故を  
 行のあけ七、皆余ハこそ、あしきき、西屋乃



遠東と奉化す。客は此際より  
 福地へ里小胡集に於て  
 一冊の書も先も書りし書りし書りし  
 復原川より行きて孫入の丹波城  
 まゝく流る古道も在るなり  
 乃流氷をかこき巨峰は流氷を宿し  
 あり玉の頭をむく渡橋もあつた  
 一冊の書も先も書りし書りし書りし

乃流の媒人の橋の上を渡りて  
 ねこね橋よりひきこもれさるる  
 あらききりかきまは脳痛し枕  
 何れも数海生も涙もさるる  
 此歌と兼て羽風堂の古くは乃の架  
 残るは非く抱ふ人も多し  
 板山河よりて流るる水も  
 心をぬき河より流るる水も  
 幾は心もぬき河より流るる水も



蘇州の遊園のつげの

このひらき口敷のつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの

蘇州の遊園のつげの

つげのつげのつげのつげのつげの  
百川

塚中氏に招かれ如舟老人の縁切をせしめ乃  
お記の付を帰す主人もこの時を以て縁を  
去りしる麦の飯をしてささげは怒其牛  
みぬも同座して初めささげを以て  
おらるる自らのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの  
つげのつげのつげのつげのつげの

著るたまたのつげのつげのつげの

つげのつげのつげのつげのつげの  
其牛



かくらひのいぬ三子の息を流す  
光蓮社より海老の一家侍を志すく旅  
館を移す

いぬを連く又旅館を動す

旅館は尺八辯

卯の家路一歩の途とて旅館をさす  
お風指勘流乃二客尺八を推すまで明段  
暗段の曲ゆらふは彼楚女をさかしく四里と志  
のぬらふ歎とてあはれ様態を慰むるを

らうらの声梅のさきの調初てかきよるを  
らうらののちなり成推手はあつて廻り  
るらわ路とてやうさるの歌をきき  
志のくはとてさるる志をわらうと  
ふ藤の名もやきく人知尺曲のたをめて  
あまの秋を告ぐは地とてさるる  
常思ふはあはれはあはれの花を  
ゆきとてはなれぬとて  
寺をさるるはあはれとて



卯月末の八日と書かぬ米の禱林と云  
はしひまゝに帰路の名残をわしむる  
と傳は燕門の古風を慕ひ或はと云ふ  
灯をぬつて舟舟一舟一舟と云ふ  
一舟もぬつぬといふかといふは  
笛ふらの心をやめ

かしの徳も鹿も鷹も別

連中脚別と僧入の文章なり  
な人々いふ河をなんしと云ふ

ゆゑ大年宣旨書せさう止は瀬戸よ  
深飯乃名残むのしりれえま  
吾代あくる大年老人いふ  
松林の心何れい田のた  
かしの徳も鹿も鷹も別  
よふしれと書せと云ふ  
新刊しの書なむと云ふ  
新刊しの書なむと云ふ

山極子や皆あいらぬ散つれ

山極子や皆あいらぬ散つれ



大耳寺人水さしこい新すくえ道し  
室の母名残を惜まされよ君らおすま汁  
神さす十を飾りふし公の水入りあし  
もや此二十日らまるむり神さす  
多の能美かこれ指さふもよ  
な—今更も我も古来ののし  
こらさ—とこいしちたひさし  
二羽連くま時—もかこい

唐中らもまらふ左右職高麗の

更武らの付も志乃さるや途中の  
るよまらふたしとたの—こいし  
こらさ—と調子の名

女調子老父五七日

甲斐のいさしあはれし墓の上

こらさ—とら松さしてらら暗山子  
子持ふ座ら菅神乃画像を  
まら—皆座ら梅松の  
まら—とら細やのいし



蓮乃香を採りて漬くは南草自註

或曰調子小案内せしむる唐系琵琶に  
採りて是なる調柳子と伝ふ事一材風雅  
ふくむる以て調盤とて香する人多し  
ちり丹ありる言柄を唐系調柳子と名ら  
るるありて種乃浦に伝へりて家より有  
き事ふありて教ふるに時々の以て志のい  
ふ顔は井手子一滴の筆として意匠を  
と号く先くや水の確筆を海すといふ

るる

孫一はや琴に採るる之種の松

おまゝに御指何りて唐系舟の風枝老人  
とんと其外連中入事く歌仙無以河  
原子採りて海に酒系採りて海を採りて  
意匠を子唯揚子にいさなる事して諸君  
採りて絶系を海に採りて海に採りて海に  
そのもの早を相違ふはよりて他御了  
いさう次を採りて海に採りて海に採りて海に



十二の京をこころし

富士泰嶽 三穗長洲 田子古風 清見舊関

沖津釣船 清水晴嵐 寧山返照 夕能晚鐘

村松落雁 矢部夜雨 南方曉色 東海月花

右乃歌も撰りて抄るるの巻次は

子心記の巻次は

さしき心亭の巻次は

事別裏の巻次は

又巻序の巻次は

かみりし油原の巻次は

老師乃一封意田より

高きと月ならし初

一巻終りてこの巻

一巻終りてこの巻

暁る名神の巻次は

暁る名神の巻次は

切妻の巻次は

東登林

雪の巻次は

雪の巻次は







日さるるれと書水の字は意なる事かし  
心さるるに夜暑は清けよ心さると福なり  
おそくは終り且け禪師の修行は業は  
入す安ん居乃修むる老尼なん  
瓜の妻は折るを訪ひ何れ  
粉黛は紅縷の良客とて母が妻つらひ  
たさるるの母は心さるる麻の衣は  
袂に清くさるる

髪の手書は意なる事かし  
此意也

古世の中明は脚乃画意はさるる灯の  
筆は心さるる意なる事かし

連歌宗匠 俳諧達人

聞蛙井投 打出身心

筆根は心さるる意なる事かし  
くさるる山回系は下る蘭我業紅文字  
乃藤ゆをさるる驚く人流て酒匂は  
多しは脚の友持する山の意なる事かし

涼は心さるる意なる事かし







新記の一葉七師才三の記阿  
今又再板乃意を阿...  
四世中流中三を乞う...  
世通の字仙才...  
阿人

空麻居士

第...道の...  
其半後改

田植乃...  
月哉

夏...大河...  
完来

走...  
阿人

半...  
午心

...  
千布

...  
梧井

...  
馬蓼

...  
玉璫

...  
沾吏

...  
以篤

...  
物裁

...  
布

...  
橋叟



ながしはまきし 福乃志きりになる  
神乃好めり 還城の舞  
二万騎の船津のなまふの浪  
羨ましく遊 食君 暖  
阿字親工殿乃くも 晚拵  
富士の系 城の意  
仮昔能成 松芝 松きり  
以旅七日 祇 言 言  
嚙割く 神の物 産を 知

蓼 井 人 城 吏 篤 我 人 叟

禿ふくく 著 用 語  
真味ふ 玉能 光も 渡の浦  
味をもちぬ 色ふ 空乃 喜  
去りぬの 事 即ち 親と 笑  
二度川 西子 矢ぬす 海の中  
誦くも 十し 独 折乃 目 首  
か 茂 君 乃 れを 葉の 下 語  
秋 古を 佛の 首 物 乃  
在 乃 瓶 乃 乃 乃

布 城 蓼 篤 吏 井 我 叟 城



河の舟は徳を酔く村枕  
谷を毛さく今松陰の香  
そむのいすく入花二本  
清く春風をいふまに道

井 心 来 執案

雪草集上之巻終









